

3月20日「さよなら原発」の集会に参加し、東京に出たついでに、都美術館に「ティツィアーノとヴェネツィア派展」を見に行きました。ヴェネツィアで花開いたルネッサンス美術で、呼び物はなんといってもティツィアーノ(1488-1567)とティントレット(1518-1595)の美女像でした。身分高い富裕者の肖像画が多くありましたが、財力、男性らしさ、高位を印象づけようとしても、男性像では美しさで魅了できないのです。その点女性は何も持たない裸像が一番目を惹きつけるようです。ティツィアーノの「マグダラのマリア」は私が最も見たい絵でした。泣いて、涙で目も鼻も赤くなって、それでも、香油の壺を傍らに置き、天を仰ぐ、真剣な、美しい姿でした。



イエスの母マリアとは全く違う姿で描かれるのがマグダラのマリアです。その理由はグレゴリウス教皇(540?-604)が591年に説教をし、マグダラのマリアを「イエス様の足を涙でぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、接吻し、香油を塗った、罪深い女」、即ち「悔悛した娼婦」だとしたことによることとされています。根拠のない、偏見でした。ペトロと並ぶ、「使徒中の使徒」と評されたという伝説が、ギリシャやフランスではあるということですが、1969年に教会の聖人暦を改定し、この「汚名」が晴れるまで1000年以上もマグダラのマリアはそのように理解され、美術作品に表現されてきたのです。女性は男性を魅了してやまない存在なのに、

信じるに足る者としては受け取られてこなかった長い歴史があるのだと、つくづく感じさせられます。

聖書では、マグダラのマリアはイエス様の死後に登場することが多く、彼女の素性を示す記述は、**悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、…彼女たちは自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。(ルカ8:2)**です。精神疾患を癒され、その後イエス様に従い、宣教活動を金銭的、物質的に支えた女性です。そして、弟子たちがイエス様を見捨てて逃げ去った後も、埋葬を見守り、亡骸に香油を塗るために墓地に出かけた人です。その時、復活したイエス様に会い、弟子たちに伝えたと記されています。けれども、四つの福音書ではマリアの言葉を聞いても弟子たちが信じたとは記していません。すべてを捧げて従い、最高の喜びと感謝を味わった素晴らしい女性だと思います。私は幼い時から画集で見っていた清潔感溢れるフラ・アンジェリコのマリア像に静謐な美を感じます。



フラ・アンジェリコ (1395-1455)



ペルジーノ (1448-1523)



ティントレット (1560 - 1635)



カラヴァッジョ (1571- 1610)